

一人芝居「ひととせ」が高校演劇日本一に

―部員1名の同志社高校演劇部に文部科学大臣賞

「演劇甲子園」で最優秀賞に輝く

同志社高校演劇部が、唯一の部員である奥田菜津なつさんの熱演により、2006年8月3～5日に京都府八幡市で開催された第52回全国高等学校演劇大会において文部科学大臣賞（最優秀賞）を受賞しました。

同校演劇部は2005年に行われた京都の支部大会および府大会で最優秀賞を受賞、開催県枠として翌年の全国大会への出場権を獲得。全国大会では参加11校の中から最優秀に選ばれました。支部大会から一貫して奥田さんが脚本・演出・出演をほ



脚本・演出・出演の
一人三役
同志社高等学校3年生
奥田 菜津 さん

ぼ一人で手がけた末の快挙です。奥田さんの受賞の感想は「最初はただびっくり。貴重な体験ができたことが評価されて嬉しかったです」。

演劇部の明日へ期待を込めた作品

参加作品は「ひととせ」（上演時間52分）。奥田さんが演じたのは、部員が1人きりで存続の危機に瀕している演劇部の生徒でした。主人公はあの手この手で新入部員の勧誘に奮闘しますが、見学に来た新入生が友人のクラブに入ってしまったり、一人芝居の脚本を自分で書き、部のアピールをするはずだった文化祭には申請書を出し忘れて参加できなかったりと失敗ばかり。主人公は落胆しながらも、たった一人の部室で、自分はまだ芝居が好きだったことに気づきます。そして主人公の卒業後、奥田さんが二役を演じる新入生が部室を訪れ、幻の文化祭作品となった脚本を見つけて読む場面で幕が下りるというストーリーでした。

同志社高校演劇部も現在の部員は、奥田さんただ1人。まさに現実を地いく作品でしたが、演技から舞台転換まですべてを一人でこなすため、季節の変化を表現するのに主人公自らが舞台装置の枝を演じながら取り替えるなど工夫を重ねた演出が、文部科学大臣賞の評価対象となりました。常に明るさを失



主人公が人形を相手に芝居の稽古をする「ひととせ」のワンシーン

わない主人公の姿勢と、ぬいぐるみを相手におしゃべりをするコミカルな演技も好評だったそうです。「謙虚で、もともと言葉に対して敏感な生徒。舞台度胸も満点」というのが、演劇部顧問の加藤未知先生の奥田さん評。本番ではアドリブも飛び出して、見守る先生をはらはらさせたとか。

「ストーリー自体に目新しさはありませんし、何か力を込めて伝えたい特別なメッセージがあったわけではありませんでした。ただ、季節が巡ってまた桜が咲くように、自分のしたことが次代へつながってゆくことの大切さを演じたいと思いました」と、奥田さんは作品の意図を話してくれました。舞台のラストシーンで流れたのはパッヘルベルのカノン。同じ旋律を繰り返しながら異なるパートが追いかけて合うカノンの調べに、「つながってゆくもの、伝えられるもの」という作品テーマが託されたのです。

奥田さんを成長させた「ひととせ」

原案は奥田さんが約1週間で執筆。同部の卒業生から指導を受けながら、支部大会出場までの約2カ月間に第6稿まで書き直しが行われました。「演技よりも演出という作業に奥深さを感じました。同じ台詞でも言い方ひとつによって芝居の雰囲気は全く変わります。映像と違い、芝居の内容がストリートに客席の反応となって返ってくる点も面白かったです」。

近年、同校演劇部は支部大会では毎年のように優秀賞を受賞していましたが、最優秀賞には届かず、2004年も府大会出場を逃しました。そのとき上級生に向かって「来年は最優秀賞を取ります」と決意表明をしたのが、「なんとなく楽しそうだ



文部科学大臣賞表彰の様子

つたので」入部して間もない、当時1年生の奥田さんでした。その上級生たちが卒業して部員は2年生の奥田さんと3年生1人になり、翌年は奥田さん1人だけに。2年生の途中から演劇部を実質的に1人で背負う形となり、「コンクール出場が途切れるのはいやだったし、先輩たちに最優秀賞宣言をした手前、仕方なく」一人芝居を決意。結果は見事に宣言のとおりになりましたが、開き直るまでは相当悩み、加藤先生に相談を重ねた

そうです。この葛藤もまた、奥田さんをたくましくさせたのかもしれない。

年度をまたいで行われる全国大会であるため、ブロック大会時のキャストが3年生の場合、全国大会への出場権を得ても参加できなくなり、役者が大幅に入れ替わるケースが少なくない中、今大会の同志社高校演劇部は文字どおり「完全なオリ

ジナルメンバー」のまま全国大会へ進出。たった一人で芝居づくりに挑み続けた奥田さんの「一年」が、そのまま「ひととせ」という作品になりました。

素顔は好奇心旺盛な文芸愛好家

「ひととせ」を創り上げる過程で演出の面白さに目覚めた奥田さんですが、同志社大学法学部進学後は司法の道を志すそうです。今のところ演劇を続ける予定はなく、「いろんなことを体験したい」とか。好きな作家は司馬遼太郎、松本清張、志賀直哉に宮沢賢治。「宮沢賢治は、独特の世界なのに誰もがすんなりと入っていきける美しい文章が好き」。ルノワールなど印象派画家の絵画、映画、音楽にも関心を寄せる多感な高校生です。

奥田さんは和歌山県出身。同志社へは高校から入学しました。「自由・自治・自立を守る校風が大好きです。それぞれ好きなように生きているのに、無茶をする生徒はいません。これが本当の自治自立。一人芝居に踏み切れたのも、同志社高校で過ごした時間のおかげだと思います」。

奥田さんの同志社への思いは「ひととせ」の舞台でも密かに発揮されました。部室のセットの一角に、こっそり新島襄の似顔絵を描いたというのです。普段の稽古場である白鷺会館に掲げられた新島の肖像画が「いつも見守ってくれていたから」と。

奥田さんが卒業すれば、現状のままでは同校演劇部は部員がいなくなりますが、「高い意識をもち、友達と連れ立ってではなく、一人で入部してくる生徒が多い」（加藤先生）という演劇部です。第2、第3の奥田さんのような生徒が現れることを期待したいものです。